

## 秋田俊一先生に贈る言葉 に代えて

寺 村 武

会者定離は浮世のならい、とはいうものの、それも度重なると何か因縁めいたものさえ感じさせる。

秋田さんとの出会いは、彼が留萌の女学校に生物の教師として赴任して来た昭和22年の春であった。越えて23年、ともども北大に入った。ひどいインフレで、アルバイトに余念がなかった。ともに大八車を曳き便利屋をやったこともある。26年に卒業、彼は東京の研究所に勤め、山口ゼミの延長である漁業問題の研究に専念したが、研究所が高度成長の始まりのなかで経営困難となり、離職。その後、彼は海苔生産の漁協にも就職したが、一次産業の構造不況と海水汚染の公害で、ここも閉鎖の運命に至った。一方、私は学卒後、道庁の研究所に入ったが、これも昭和37年、発展的(?)に解消、新設の研究所に組み込まれた。この研究所に水産経済課が新設されたが、課長には、庁内放送で「秋田俊一を任ず」と発表があり、オッ、また彼と一緒にだな、と驚いた。しかし、この研究所も高度成長の末期から斜陽化のかげりが見え、昭和55年に閉鎖。その後57年まで、役所のなかで、ともに研究職としてとどまった。この間20年、思い出も多いが、割愛させて頂く。

昭和57年、札幌大学女子短大部の経営学科新設とともに、彼も私も、またまた一つ屋根で暮らすこととなった。どういう縁なんだろうかと、感慨も一入であった。それから7年が経ち、いま、彼は定年で職場を去ろうとしている。

彼の研究業績については漁業経済、経営が主体で、論文その他数十編にのぼる。その内容については、まことに申し訳ないが、門外漢の私には分からないので、控えさせて頂く。附言しておきたいことは、彼の研究、調査、報告の姿勢であろう。実に丹念に資料を収集、分析、精査して論点を整序し、推敲に推敲を重ねていくというもので、通勤には大黒様のような袋を背負い、両手にも提げて往復していることが多かった。中味はすべて資料である。傍目にも骨身を削る毎日のように思われた。痛勤である。(首がまわらなくなり、入院したこともあった。)彼を、斯界で全国五指にあげた評論もあると、第三者から聞いた。学界では、日本漁業経済学会理事、北日本漁業経済学会会長(現職)を何年もやっているようだ。それはそれとして、彼はこれからも、絶えることなく、研究に取り組むであろう。いま、当短大における最終のレポートを執筆中とか、有終の美を全うして欲しいと願っている。

彼の教育態度について一言。当たり前とはいえ、休講もせず、毎講時プリントを用意し、チョークの粉にまみれ、時間一杯授業をやり、出欠をチェック、欠席の多い学生には気を配っていた。出色のことは、講義に先立ち、数分を割いて就職向けのテストを行ない、後日、採点、返却していた。なかなか出来る芸当ではない。学外研修では、道内はもとより、本州方面から海外まで学生を引率、面倒をみている。学生のオチコボレ・留年の防止、就職のためには、厭うことなく動いてくれた。ゼミ単位の卒論集も当初から発行し、現在に至っている。学生には厳しいゆえか、「仏の秋田」という声は聞かれませんが、彼の定年退職を耳にしたOBたちから、感謝と励ましの宴を開いてくれた由、故なしとしない。

彼の研究室は、5号館から現在に至るまで、植物のアロエ栽培で賑やかである。薬用、活力

源のためらしい。ここに彼の生きかたの一面を窺うことができる。また、山好きであるが、強いて頂上には拘らない。途中、フキ、ワラビなど旬のものを採取する。単なる道草ではない。少なくとも、彼のレジャーは、労働力の生産的消費であり、実践的エコノミストの感がある。しかし、エコマイザーという印象は受けない。

彼の特性について、最後に一言云わして貰えば、彼ほど寡黙の人は少なからう、ということである。会議の席上で、議事の終わり頃にしゃべり出す程度である。彼は高専時代、弁論部で活躍した雄弁家だと、誰かから聞いていた。さわやかに論断する力量をもっているのに、と歯痒く思うこともあった。巧言令色を慎むためか、相手を傷つけまいとする配慮か、私には分からない。しかし、翻ってみれば、雉子も鳴かずばの譬もある。陰口も云わず、また、和しても同ぜず、聊か飛躍するが、ここに札幌大学教職員組合の執行委員長に推された所以もあるのだろうか。

昨夏、彼と留萌方面に出張した（高校訪問）。短大に来て、彼との同行は、これが最初であり、最後だと思った。何十年ぶりかの留萌は、町並がすっかり変わっていた。それでも、宿所に近い瀬越山の上からみた夕日、真夏の日本海に沈もうとする、真っ赤な、大きい太陽、茜色に染まった空と雲……。それは四十何年の昔と少しも変わっていなかった。彼も私も息をのみ、言葉がなかった……。いま、彼は何を考えているのであろうか。来し方七十年、その生地に行き、胸中に去来するものは何なのであろうか……。誰かの歌に

「暮れなずむ町の 光と影の中 去りゆくあなたへ 贈る言葉……」

という一節があるが、私は、何をもって贈る言葉としたらよいのであろうか……。その夜は、徳利が何本もカラになった。「モット持って来イ！」と、彼は云う。胸に迫るものがあるのだろう。が、明日の予定がある。往年の北満戦線でも夢うつつに突っ走られると、忽ち、日本海へドボンだ。ガマンして就寝。

紙数も尽きているのに、いくら書いても意を得ない。去ることへの侘しさのあまり、徒に筆を走らせるのであろう。矢張り、会者定離なのか。ともあれ、忘年会などであの江差追分や沖揚音頭が聞けなくなったのは残念である。

ここに、彼、否、秋田先生の、札幌大学並びに女子短大部への一方ならぬご尽力に感謝し、先生のますますのご健康とご発展をお祈りするとともに、あわせて不肖、私との半世紀にも近いご交誼に深謝して、駄文を擱く次第。

長生きして下さい、秋田さん。

文中妄言多謝 平成元年3月20日